学級活動実践研究のための推進ガイド

社会性を育む学級活動の創造

～「交流プログラム」を活用して～

名古屋市特別活動実践研究会　開発部

1　社会性を育む学級活動を進める際に，留意することは･･･

年度当初,学級集団は所属集団としてスタートをします。子どもたちは新たな友達づくり，仲間づくりに奔走します。よく知らない相手でも，とりあえずどこかのグループに入ろうとする子どももいます。

やがて，個々の性格や好み，相性，特技がある程度分かっていきます。この関係は，仲良しグループであったり，時には，力による親分子分の関係であったりします。これらは,「二者関係」といって，自分たちの仲間だけに通用する見方や考え方に支配されています。したがって，この関係がいくら深まっても，準拠集団への脱皮は起こりません。単に長時間，同じ船に乗り合わせた旅人同士と同じです。

ところが，質の高い交流を通して，他者理解を図る活動を重視していけば，準拠集団へと変容を見せていきます。つまり，集団生活の改善・向上を意識した活動が二者関係から三者関係への脱皮へと変わっていきます。三者関係とは，仲間だけに通用する考え方の支配から逃れ，異なった考え方をする他者を認め，協力できる関係です。三者関係では，異質性を含んだ相手と発展的な折り合いをつけるために他者との交流を深める活動がカギとなります。

なお，他者理解は，交流によってもたらされ，三者関係に発展するものです。単に，考えの異なった級友の意見を聞き，自らの考えを発表するだけでは，他者理解はできません。逆に，意見を述べなくても，級友の話合いを聞くことにより，他者性に気付き，他者理解ができる子どももいます。「他人」と「他者」とは，異なるように，級友との意見の違いを知るだけでは，他者理解はできません。まず，自分の意見とは異なっていても，だれもが自分と同じように考え，願いをもっていることに気付かせます。そして次に，他者を理解し，支え合おうとする態度に高めることが必要です。個々の夢や希望が，集団としての夢や希望に包含され，集団としての共同の目的に向かって子どもたちが活動を始めたとき，共同の目的を核とした学級集団が発生し，集団に寄与しつつ自己実現を図ろうとします。そして，この状態において，子どもたちの社会性が育まれるということになります。ここに「子どもの社会性」を育むにあたって，特別活動，とりわけ学級活動の大きな役割があると言えるのです。

さて,学級活動では，子どもたちの自治的・自発的な活動を重視します。しかし，学級活動は，決して「子ども任せの活動」ではありません。指導する教師が，学級づくりを見通しながら，意図的・計画的に交流を図り，他者理解を深める活動を位置付け，子どもの「社会性の育ちを促す働き掛け」をすることが大切になってきます。そしてこの活動を通して,集団に寄与しつつ自己実現を図ることができたとき，私たち「なごやとっかつ」の目指す，学級活動で育む社会性が育ったといえるのではないでしょうか。

わたしたち，「なごやとっかつ」が考える社会性を学級活動の実践を通して育てるためには，どのような交流をさせるとよいのでしょうか。子どもの「社会性の育ちを促す働き掛け」を指導の押さえどころとし，社会性を育む交流プログラムとしてまとめました。

2　具体的には，どのような押さえをするとよいでしょうか

実践例を右ページに示しながら，交流プログラムを紹介していきます。

交　流　プ　ロ　グ　ラ　ム　I

●●●●●●●●●●●●●●【事前の段階】●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

交流の内容を明らかにする

事前に出された議題や計画案等に対する考えや立場の違いや思いのずれ・学級の目指す方向と学級の現状との比較等から，どのような立場の違いで交流をさせるかを考え，話合いの論点や話合いのねらいを明らかにします。

交流への意欲を高める

交流への意欲を高めるために，話合いの前の議題化の説明場面や話合いの進め方を決める場面に組み込みます。

教師または計画委員が，本時の話合いのねらいを説明し，話合いに対する切実感や期待感を高めるために大切な押さえどころになるところで，話し合うまでのこの部分は，指導者として学級活動を進めるにあたり，とても重要な意味をもつことになり，提示の工夫や内容の吟味など十分な準備の必要な場面でもあります。

ねらいの意識付けを図る

話合いのねらいを意識付けることは，集団に寄与するという社会性の育成に必要となるものです。学級目標と関連付けたり，学級の目指す方向性やビジョンを意識付けたりします。

計画委員会で議題を設定するにあたっては，学級ポストや子どもたちの声，先生の願いなどから議題を決定します。その際，次のような留意事項があります。

学級目標や現状の学級の様子などを考慮し，異なる考えや立場の子どもが十分に交流できるように意識します。

現在の学級の様子や学級目標を振り返り，自分たちの目標に対して，どの点が充足していて，また，どの点が不足しているのかを意識調査やアンケート等で調査するのも有効です。調査を通して，どのような交流をしていけばよいのかを計画委員会で話し合った上で，議題を決定しても良いでしょう。

その上で，少数意見，反対意見，問題点等を想起する場面を設定したり，話合いのめあてを明確にしたりして，話合いのねらいを焦点化させ,話合いの柱立てをします。

《実践例》

交流プログラムⅠ

【事前の段階】

題材Ａ 「ドッジボール大会を開こう」	題材Ｂ 「係活動をパワーアップしよう」	題材Ｃ 「学級のボールの使い方を考えよう」
交流の内容を明らかにする		
ドッジボールについて抱く，子どもの気持ちについて調査します。	係活動の現状について見つめ，活発に活動している係とあまり活動していない係があることに目を向けるようにします。	学級目標の「仲良し」を基に学級の現状を見つめ直し，改善した方がよいことを出し合って議題化します。
交流への意欲を高める		
運動が苦手に感じている子の気持ちを教師や計画委員が紹介することで，「苦手に思っている子がいるから，みんなでアイデアを出し合って，みんなが活躍できる集会にしよう」といった，話合いへの切実感を高めることにもつながります。	「どんなことをすればいいのか分からなくて困っている」など，活動があまりできていない係の子の気持ちを教師や計画委員が紹介することで「係活動を活発にして，学級目標の『楽しい学級』にするために，みんなで活動のアイデアを出し合おう」といった，話合いへの切実感を高めることにもつながります。	学級のボールを使えなくて困っている子がいることを教師や計画委員が紹介することで，「学級目標の『仲良し』を実現するために，この問題を話し合って解決しないといけないね」といった，話合いへの切実感を高めることにもつながります。
ねらいの意識付けを図る		
ドッジボールでは，苦手な子と得意な子という異なる立場が生じます。それを踏まえて，計画委員会で話し合って，集会のねらいを「だれもが楽しめるドッジボールをしよう」と決めることで，異なる立場の子どもが十分に交流できるようになります。	係活動では，活発に活動する係とそうではない係が生じます。そうしたときに，学級目標と現状を比較することで，学級目標を実現するには，すべての係が活発に活動できるようにするとよいことに気付くようにします。そうすることで，活発な係とそうではない係の子どもが十分に交流できるようになります。	学校生活では，様々な生活上の問題が生じます。学級のボールの使い方もその一つです。そうしたとき，学級目標と学級の現状を比較します。学級目標と関連付けることで，ボールをいつも使っている子，使えなくて困っている子という異なる立場の子どもが十分に交流できるようになります。

●●●●●●●●●●●●【本時の話合い（前半）】●●●●●●●●●●●●●●●

① 提案とその理由を説明する。

※ 波線の項目は《実践例》があります。

例えば，話合いのめあてや学級目標を書いたものを掲示して，話合いのねらいを意識させます。このことにより，ねらいの意識付けを図ります。

② 提案に対して，反対意見などの異なる意見も提示する。

アンケート等事前の調査結果（反対意見や少数意見や問題点など）を視覚的に提示し，自分とは立場に違いがあることに気付かせます。このことにより，自分たちがやりたいだけではなく，学級の他の子の気持ちを汲み取って話合いを進めていかなければいけないことに気付かせるようにします。

③ 異なる立場を発表し合う。

原案に対しての意見を出し合います。ここで大切なことは，異なる立場をお互いに理解し合うことです。まずは，友達の考えに対して，すぐに反対意見を出さないで，まずは，少数意見の立場・異なる立場に立って，ねらいと照らし合わせて肯定的に聞くようにさせます。

●●●●●●●●●●●●【本時の話合い（後半）】●●●●●●●●●●●●●●●

集団を意識した交流を図る

討議の場面で集団を意識した交流を図っていきます。

話合いの内容が提案理由や話合いのねらいからそれた場合に，教師が必要に応じて，子どもに気付かせるために助言をします。

しかし，話合いの習熟した学級においては，教師が直接かかわらなくても，レベルの高まった子ども自身による修正を促す発言にかわることもあります。

つまり，第三者の内面化が子どもの中に進み，話合いの習熟度が増せば，子ども自身による話合いで論点が十分焦点化でき，教師の直接的な働きかけの必要がなくなることになります。それでは，学級会の後半の流れの中で，交流を通した他者理解を深める話合いをまとめます。

④ 互いに質問し合い，新たな提案を考える。～他者理解を深め，三者関係に発展する話合い～

ここでのポイントは，「活動のねらい」と「少数意見」，「交流対象」を意識した話合いを進めることです。しかし，児童は時として，自分がやりたい活動に固執し，ルールや方法などといった細かいところにのみに意見が集中することがあります。

このように他者理解ができていないと感じたときは，提案の理由や実践のねらいといった，三者関係のレベルに達した児童による修正意見を待つか，話合いのねらいを直接，児童に再確認するため，話合いを見守る教師による働き掛けをタイミングよく行わなければなりません。

学級集団において核となる，共同の目的が子どもに内面化され，話合いの習熟度が増せば，集団を意識した交流が図れ，子ども自身による話合いで論点が十分焦点化でき，教師の直接的な働きかけが必要なくなることもあります。

《実践例》

……【本時の話合い（前半）】……

題材Ａ 「ドッジボール大会を 開こう」	題材Ｂ 「係活動を パワーアップしよう」	題材Ｃ 「学級のボールの 使い方を考えよう」
②　提案に対して，反対意見などの異なる意見も提示する。		
ドッジボールを苦手に思っている子どもがどれぐらいいるのかを事前に調査し数値化したものを示したり，どのような点を不安に感じているかなどを事前に調査し，子どもの声をまとめて発表したりすることもできます。	事前に，これまでの活動の成果についてアンケートを行います。その結果を基に，数値化したものや，困っていることをまとめたものを示すようにします。	学級のボールを使いたいと思っているけれど，使えていない子どもがどれくらいいるか事前に調査し数値化したものを示したり，どんな気持ちでいるかをまとめて発表したりすることができます。

……【本時の話合い（後半）】……

④　互いに質問し合い，新たな提案を考える。 ～他者理解を深め，三者関係に発展する話合い～		
「だれもが楽しめるようにする」などの活動のねらいを意識して，ドッジボールが苦手な子の楽しめない理由を聞き，理解するようにします。その上で，苦手な子も楽しめるようなルールを話し合って決めていきます。	学級目標を基に，「楽しい学級にするために，困っている係を助けよう」などの活動のねらいを決めます。そして，活発に係活動ができない理由を聞き，理解するようにします。まず，困っている係に対して，アドバイスをします。その上で，係活動で困ったときには，どうするかを話し合って，決めていきます。	学級目標を基に，「みんなが仲良く過ごせるようにする」などの活動のねらいを決めます。 そして，ボールをいつも使っている子と使いたいけど使えない子，双方の理由を聞き，理解し合うようにします。その上で，みんなで話し合って，学級のボールの使い方のルールを決めていきます。

⑤　集団決定する。

多数決による集団決定の場合は，その案を選んだ根拠が話合いのねらいに基づくものであり，集団生活をよりよくするためのものでなくてはいけません。多数決を行うときには，司会グループの児童や教師が，話合いのねらいに立ち返るように学級全体に声を掛けるとよいでしょう。

しかし，これも，話合いの習熟度によっては，この確かめの声掛けは省いてもよいことになります。

●●●●●●●●●●●●●●【話合い後の指導】　●●●●●●●●●●●●●●

集団を意識した上での他者理解の深化を図る

話合いの後，振り返りの場面を設定し，話合いを通してよかったことを出し合い，交流や他者理解レベルの高まりを評価し合います。

これらは，必ずしもすべて授業に組み込まないといけないわけではありません。また，教師が，直接的に働き掛けなくても，レベルの高まった子どもからの働き掛けでよい場合もあります。

それは，学級の話合いの習熟度によっても変わってきます。ですから，これらを指導の押さえどころを基本としてとらえ，提案する議題や話合いの内容から，また，学級の実態に応じて，組み込み方を吟味することが必要になるわけです。

⑥　話合い後の振り返りをする。

単なる話合いの感想ではありません。考えや立場の異なる級友と話し合って，発見した事柄について発表させることが大切です。この発表を通して，学級集団全員に他者への気付きが広まっていくからです。

⑦　参加の仕方を自己決定する。

集団決定した活動への参加の仕方を自分なりに決め，カード等に書かせます。単に個人の楽しみ方の追究ではなく，集団決定された内容の範囲でねらいにせまることのできる活動方法を示唆します。

⑧　社会性尺度測定紙「ふりかえりプリントⅠ（話し合い）」を実施する。

社会性の高まりを評価する資料となります。

《実践例》

題材Ａ 「ドッジボール大会を 開こう」	題材Ｂ 「係活動を パワーアップしよう」	題材Ｃ 「学級のボールの 使い方を考えよう」
⑤　集団決定する。		
「だれもが楽しめるようにする」ために出された様々なルールから，集会のねらいに立ち返らせた上で集団決定します。	係にアドバイスしたことは，それぞれの係が活動の参考にするようにします。 その上で，係活動で困ったときには，どうするかについて，集団決定します。	ボールの使い方について出された様々なルールを基に，みんなにとってよりよい方法を集団決定します。

【話合い後の指導】

⑦　参加の仕方を自己決定する。		
当日の自分の取り組み方や態度を考えることになります。例えば，このドッジボール大会を通して，自分はこのような気持ちで参加したいなど，集会のねらいに沿った自己決定をするよう，働き掛けます。	係活動に対しての自分の取り組み方を考えることになります。例えば，○○係として，学級目標を実現するために，こんな目標で取り組みたい，困っている係に対して，自分はこんな態度で臨みたいなど，学級目標に沿った自己決定をするよう，働き掛けます。	ボールの使い方について，自分の取り組み方や態度を考えることになります。例えば，みんなが仲よく過ごせるようにルールを守りたい，ルールを忘れている友達がいたら声を掛けたいなど，学級目標に沿った自己決定をするよう，働き掛けます。

交　流　プ　ロ　グ　ラ　ム　Ⅱ

実際の学級活動では，みんなで話し合ったのち，話合いで決まったことを基にした実践活動を行うことになります。それでは，話合い後の実践活動における交流プログラムⅡの基本型をまとめます。

●●●●●●●●●●●【集団決定に基づく実践活動】●●●●●●●●●●●

①　当日の流れや活動の内容を確認する。

どのような実践活動を行っていくのかを説明します。

②　実践の意味やねらいを確認する。

集団決定までの話合いの流れを簡単に説明し，特に異なる立場の存在やその解決について話し合ったことを想起させます。

③　参加の仕方を確認する。

各自がカード等に記述した参加の仕方を簡単に確認できるようにします。（カードは目に触れる場所に掲示しておくのもよい方法です。）

④　実践する。

⑤　見直しタイムをとる。

活動がねらいに即したものになっているのか，あるいは，自らが決意した行動目標を実践しているかを見直す時間を設定します。

もし，ねらい通りに実践が進められているときには，あえて見直しタイムをとる必要はありません。しかし，それが十分できないような状況になってきたときには，教師による気付きを促す働きかけをする必要があります。教師の働き掛けるポイントと子どもたちの意欲付けの場として大切に扱います。

⑥　実践の振り返りをする。

実践しての感想を発表し合います。特に，だれかに受けた思いやりや励まし，自分の気持ちの変化などを真剣に振り返らせることが大切です。発言者に対しては拍手をさせる。小さな輪の形にさせると発表しやすいです。

⑦　社会性尺度測定紙「ふりかえりプリントⅡ（かつどう）」を実施する

「ふりかえりプリントⅠ（話し合い）」と併せて，社会的の高まりを評価する資料となります。

3　社会性の高まりは，どのようにとらえればよいのでしょう？

私たちは日ごろから，子どもの実態に応じて指導方法を選択し，工夫をして実践しています。この成果を確かめるために，私たちは評価をしています。ここでいう評価とは，このような手だてで指導すると，子どもはこう変容した（社会性が高まった）ということの証拠を示し，明らかにしていくことです。

従来の評価方法は，目標に照らし合わせて，子どもの活動の様子や感想文，発言内容などから評価してきました。評価者に都合のよい発言内容や感想文だけを取り上げるだけでは，信頼性のおける評価にはなりません。また，発言分析だけといった単独の評価だけでは，発

《実践例》

交流プログラムⅡ

……【集団決定に基づく実践活動】……

題材Ａ 「ドッジボール大会を 開こう」	題材Ｂ 「係活動を パワーアップしよう」	題材Ｃ 「学級のボールの 使い方を考えよう」
⑤　見直しタイムをとる。		
活動の途中に時間を設け，自分が考えた自己決定カードなどをもう一度見に行き，後半の活動について，もう一度考え直す時間を設けなくてはいけません。	週末などに係活動について見直す時間をとり，係活動カードに書いた自己目標を確かめるようにします。見直すことで集団決定したことを意識できるようにします。	朝の会などで，自分が考えた自己決定カードの内容をもう一度確認し，「みんなが仲よく過ごせるようにする」という活動のねらいを意識できるようにします。
⑥　実践の振り返りをする。		
ドッジボール集会後に帰りの会などで時間をとって行います。 自分が級友にしてもらってうれしかったことや自分の気持ちの変化などについて発表し合います。	発達段階に応じて，１か月または，学期末に行います。 各係の頑張りを認め合うことを中心に行います。「〇〇係の頑張りで学級目標に近づいた」というようにです。 「係活動発表会」のような形式で行うこともできます。	学級のボールの使い方を決めてから１か月程度過ぎたときに行います。 帰りの会などで，ボールの使い方を決めてよかったことを発表し合うことで，自分たちで学級のきまりをつくることの大切さに目を向けるようになります。

言のなかった子どもが評価の対象から外れるので，偏った証拠に陥ります。さらに，「終わりよければ，すべてよし」とする，結果をすべての指導方法の成果として評価としてしまうことも曖昧な評価となります。　特別活動実践研究会では，このような評価課題を解決していくことを目指します。特別活動の特質として，1)個人の評価だけでなく，集団の発達や凝集性といった変容を評価していくこと，2)社会性や生きる力といった「見えない学力」を評価していくことが大切な評価課題となっています。みなさんの今後の評価に対する創意工夫が求められます。

本研究会では，これらの評価課題の一つの解決策として，質問紙を開発し，これまで行ってきた評価方法をあわせて評価をしていく方法をまとめました。

この評価方法は，交流プログラムで育成する，「交流」「他者理解」「自己実現」「集団寄与」といった社会性の要素の高まりと，それぞれの要素を高める指導方法をリンクして評価できるように考えました。詳細は以下に述べます。

子どもの実態や意識といった「話合いの入口」から，発言や感想といった「話合いの出口」に当たる部分，つまり，話合いの過程における発言のない子や発言をしない時間帯での心の動き，いわば「話合いのトンネル」になった部分については，分析されてきていません。今回の分析では，「話合いのトンネル」の内部にまで焦点を当て，その内部をいかに透視して，それをどう見取るかという観点での分析を試みました。

そうして作り上げたものが社会性尺度測定紙「ふりかえりプリントⅠ（話し合い）」および社会性尺度測紙「ふりかえりプリントⅡ（かつどう）」です。話合いの直後，児童の話合いにおける自分の気持ちを振り返り，質問紙法で回答するものです。

しかし，社会性尺度測定紙「ふりかえりプリント」は，子どもの変容をすべて推し量るといものではありません。従前からある評価方法と組み合わせることでその真価が発揮されます。ですから，大切なのは，子どもの育ちをできるだけ多面的に見取ることです。そして，考察するには,事前の段階で下記に示したような評価計画を立てることです。

① 発言分析を行うために，その箇所の発言を明文化する。
② 社会性尺度測定し，「ふりかえりプリントⅠ・Ⅱ」を集計する。
③ 抽出児の発言，事後の感想とふりかえりプリントのデータを併せて考察する。
④ 参与観察者を頼んでおき，抽出児の様子について，考察の際の参考にする。

さて，データの処理の仕方ですが，エクセルベースの入力表に児童全員の回答を４件法で入力します。するとたとえば，縦軸に「交流」と横軸に「他者理解」を設定したグラフに，入力した全員のドットが示されます。これらのドットの固まりを集団として見るならば，集団の評価ができます。個別の子どもを見るならば，１つのドットに表れるので，その位置を見ます。右上にドットがあれば，社会性の高まりが判断できます。

ただ，一実践だけでは，変容が分かりません。複数の実践を行い，それをグラフに表し，見比べることによって，以前との違いが判断できるわけです。

さらに，交流プログラムには，数個の指導方法が組み合わさっています。たとえば，事前段階の指導の工夫は，自己実現の高まりにつながります。めあてを確かめる手法は，集団寄与の高まりにつながります。ですから，グラフに表れた個人，あるいは，全体のドットの位置を見る際に，指導方法とその効果を照らし合わせて分析することが可能となっています。

（振り返りプリント作成：福春小宮田延実，入力表とグラフの作成：港楽小福永尚史）